

- (5) 『王禹偁詩文選』を主とし、『新装版・宋詩鑑賞辞典』(前野直彬編 東京堂出版・一九九八年)で補足した。
- (6) 『杜詩詳註』(仇兆鰲注 中華書局・一九七九年)の「槐葉冷淘」に、「君王納涼晚 此味亦時須」とある。
- (7) 「飽慚廣文鄭 飢謝魯山元」の句の後に、自注で「廣文先生飯不足、元魯山餓而死。」とある。

唐宋詩における「野情」について

宇都 健夫

一 『魯山山行』における「野情」

梅堯臣『魯山山行』の第一句目に、「野情」という語が登場する。詩全体の情景を表出する上で、この語は重要な役割を果たしていると思われる。ではその「野情」とは、一体どのようなものなのだろうか。この点に関して、他の詩に用いられている「野情」と比較しながら考えてみたい。

まず、『魯山山行』を見てみよう。冒頭の「適与野情愜」という句は、「まさに『野情』にぴったり合う」と解釈することができる。では何がぴったり合っているというのか。また、ここでの「野情」とはどのようなものなのか。それを知るためには、以下の句をじっくり読まなければならない。

続く第二句と第三句は、魯山やその周辺の山々を、独りで歩きながら体感した情景を描いている。⁽¹⁾魯山に連なる山々は、高いものもあり、低いものもある。人が歩けば、それに合わせて美しい峰が形を変え、作者はそのような山々を眺め歩いているうちに、独りひっそりとした小道に迷い込んでしまった、というのである。山々の変化を巧みに捉えている点は、理知的と言えようか。

前半の句からは、作者が魯山の山歩きを心から楽しんでいる様子が窺える。美しい魯山の風景、それを体感してい

る作者の喜び。「適与野情愜」という句は、それらを併せて表出したものと言えよう。

しかし、作者の魯山山行はそれだけにとどまらない。第五句、第六句には、熊が木に登る姿や鹿が小川で水を飲む光景が描かれている。そのような穏やかな光景に目を楽しませているうちに、ふと人家はどこにあるのだろうか、という疑問がわいた。というのも、丁度その折り、雲の彼方から鶏の声が聞こえてきたのだ、というわけである。前半が静を対象にした描写であるのに対し、この後半は動を対象にした描写であると感ぜられる。

この詩においては、第二句から第八句までが連動している。そしてその中で、魯山や辺りの山々の美しさ、山行の楽しみを余すところなく描き出しているのである。したがって詩の後半を見ても、熊といい鹿といい、また尾聯の二句といい、まさに作者の情緒に符合する情景であろう。

『魯山山行』の詩全体を通して、作者の魯山を愛する気持ち、ひいては自然をこよなく愛する気持ちを感じ取ることができる。作者は第一句目において、魯山や辺りの山々、更にはそこに感じられる自然の情景が、自分のそのような気持ちにぴったりだ、と言っているのである。そして、そのような気持ちがすなわち、この詩における「野情」にほかならない。言い換えれば、自然を愛する作者の「野情」が、この詩全体を包み込んでいるのだ。

二 辞書に見られる「野情」の語義と用例

ここで、辞書に見られる「野情」の語義を調べ、併せて『魯山山行』以外の詩における用例を探してみたい。まず『漢語大詞典』を見ると、「野情」の説明として、「不受世事人情拘束の閑散心情。2天然情趣。」とある。また諸橋轅次『大漢和辞典』（修訂第二版）には、「田舎人のこころ。又、田舎のおもむき。野趣。」とある。これらを纏めると、「世事や人の干渉に煩わされない、田舎ののびのびとした情趣」といったことになる。またここで、第一節で考察した『魯山山行』における「野情」の捉え方を重ねてみると、「田舎の情趣」というよりは、むしろ「自然の

なかに感じられる情趣」と言つたほうがよいように思われる。そしてその「自然」は、「世事や人の干渉に煩わされない」ところのもの、すなわち世俗の人界と対極にあるものである、ということが窺われる。

上の二つの辞書には計七つの用例が挙げられているが、いずれも詩から取つたものである。そのほか『佩文韻府』には、詩の用例四つがあげられている。つまり少なくとも十一の詩の用例が見られるわけだが、しかしそれらは時代も唐から清まで幅広く、作者も様々である。一例として、白居易が校書郎の官職にあつた時の、『早春独遊曲江⁽²⁾』が挙げられる。この詩では、閑職に就いている作者が、初春ののどかな曲江に沿つて散歩をし、自然の情景を体感する様子が詠まれている。そして最後に、「慵慢疏人事 幽棲逐野情 迴看芸閣笑 不似有浮名 (慵慢人事を疏んじ 幽棲野情を逐ふ 迴りて芸閣を見て笑ふ 浮名有るに似ず)」（私は生来怠惰な性格で世事を疏んじ、俗世間から離れ住んで野情を追い求めている。ふと振り返つて宮中の図書館を見たが、どうやら私は俗世の虚名を持つにふさわしくないようだ）という句がある。この一連の句からは、「野情」が『魯山山行』と同じような意味合いを持つ一方、世俗の官職と対比されてもいることが見て取れる。

また一方で、鎌田正ほか『漢詩名句辞典』⁽³⁾や松浦友久編著『漢詩の事典』⁽⁴⁾においては、詩によく用いられる語を取り上げ、解説する中に、「野情」の項はない。このことと上の語義・用例から判断すると、「野情」は詩に折々用いられるものの、特殊な詩語というわけではないようだ。

三 韋応物『送崔叔清遊越』における「野情」

「野情」の語が世俗の官職と対比されている、という点に関連して、韋応物『送崔叔清遊越』⁽⁵⁾という詩を取り上げ、若干の考察を加えたい。

送崔叔清遊越

崔叔清の越に遊ぶを送る

忘茲適越意

茲に越に適くの意を忘る

愛我郡齋幽

我が郡齋の幽なるを愛す

野情豈好謁

野情 豈に好く謁げんや

詩興一相留

詩興 一へに相留めよ

遠水帶寒樹

遠水 寒樹を帶ぶ

閨門望去舟

閨門より去舟を望む

方伯憐文士

方伯 文士を憐めども

無為成滯遊

為す無かれ 滯遊を成すを

(こうしていると、不遇の身の失意を忘れることが出来る。やはり君には、郡の官舎の私の書齋が静かで心に適う。野情をわざわざお上に奏上する必要など無い。詩を作ったら、自分の手元に留めておけばよいのだ。遠くに流れる水は冬の木立を帯びている。私は蘇州城の西門から、遠くへ去って行く君の舟を眺めている。地方の高官は、君の才を慕しんでくれるかもしれない。しかしいつまでも外地に留まらず、早く帰ってきておくれ。)

この詩は韋応物の友人崔翰(叔清は字)について詠んだ叙情的なもので、貞元六(七九〇)年頃、蘇州での作であるという⁽⁶⁾。第一句、第二句は、韋応物が奉職する郡の役所で、崔翰の才能がありながら官職に就けない失意を、共に分かち合っている場面であろうか⁽⁷⁾。第三句、第四句は、次のような事件に基づいているという⁽⁸⁾。杜佑という人物が淮南の地にいた時、崔翰の詩百編を時の皇帝徳宗に奏上したところ、徳宗は使者に向かつて、「こんなひどい詩を、どうして私に勧めるのだ」と告げた。そこでその詩編は、「皇帝公認の悪詩」という烙印を押された、というのである。

おそらくそれらの中には、世間の常識に囚われない、自由奔放な内容のものが多くあつたのだろう。そのような皇帝の叱責に対して、韋応物は崔翰に言う。我々の感じる田舎じみた風情など、中央にまします皇帝のようなお方に理解

されるものではない。詩を作ったらお上に奏上などせず、自分の手元に残しておけばそれでよいのだ、と。

後半は、崔翰が旅立って行くのを見送る場面である。遠くの川辺には、枯れ木立が見える。舟は川を下り、やがて見えなくなつてゆく。韋応物は蘇州城の門先で見送りながら、心と呼びかける。地方の高官は、君の文才を惹き込んでくれるかもしれない。だがいつまでも遠い所に留まらず、早く私のもとに帰ってきておくれ、と。

このように見ると、第三句の「野情」の語が、皇帝や官職といった権力と対極を成していることがわかる。崔翰は戯れを好む一風変わった人物で、奔放で束縛を嫌い、よく酒を飲んだという⁽⁹⁾。そのような崔翰の「野情」は、徳宗のような権力者には理解されなかったということであろう。

四 『魯山山行』と『送崔叔清遊越』の「野情」の比較

『魯山山行』は、作者梅堯臣が魯山の山歩きを心から楽しんでる様子を詠んだ詩であった。第1節で述べたように、そこに見られる「野情」は、自然を心から愛する梅堯臣の気持ちを表したものである。

一方『送崔叔清遊越』は、作者韋応物が、友人の才を愛惜する情を詠んだ詩である。崔翰が献上した詩編は皇帝に認められなかったが、第三句、第四句にあるように、韋応物はその詩編に深い理解を示している。ここでの「野情」は、世俗の権力に相對するものであると読める。それが具体的にどのようなものか、詩に明らかにされてはいないが、自然の情景を交えて遠景を描いた第五句、第六句から察するに、『魯山山行』にあるような自然を愛でる気持ちをも含むものである。また『送崔叔清遊越』からは、韋応物と崔翰がその「野情」に自負を抱いていることも読み取れる。

先に見た『魯山山行』の「野情」は、一見すると『送崔叔清遊越』におけるそれとは異なるもののように映る。だが、俗世間を離れた所に情趣を感じているという点で、両者は共通しているのではないだろうか。『魯山山行』にお

いても、やはり世俗の人界や権力との対比は意識されているに違いない。ただ『送崔叔清遊越』に較べて、それはつきり表出されていけない、つまりそのような意識に縛られていないという点で、「野情」の意味合いがより広がりを持つていえると言えよう。

注

- (1) 『魯山山行』全体に関して、この詩は梅堯臣の実体験に基づいているのか、それとも想像をめぐらせて作ったものか、という問題はあはる。ただこの問題はいずれにせよ、作者梅堯臣が魯山や周圀の山々、ひいては自然全体を愛する気持ちが読み取れるという点に変わりはなく、したがって以下の「野情」をめぐる解釈に影響はないと考える。なお『魯山山行』の解釈に際し、梁焯『宋詩百首浅釈』（万里書店、一九七八）、霍松林『唐宋詩文鑑賞季要』（人民文学出版社、一九八四）を参照した。
- (2) 詩の引用は、『全唐詩』（卷四百三十六）（中華書局、一九六〇）による。同書では「逐」の後に「一作遂」とあるが、「逐」のまま書き下しや解釈に問題はないと考える。また書き下し及び解釈に際し、岡村繁『新釈漢文大系 一〇〇 白氏文集 四』（明治書院、一九九五）、朱金城『白居易箋校 二二』（上海古籍出版社、出版年不明）、林德保ほか主編『詳注全唐詩 二』（大連出版社、一九九八）を参照した。
- (3) 大修館書店、一九八〇。
- (4) 大修館書店、一九九九。
- (5) 詩の本文は、『全唐詩』（卷一百八十九）による。また以下の書き下し及び通釈には、『詳注全唐詩 一』（注2参照）、陶敏ほか『韋応物集校注』（巻四）（上海古籍出版社、一九九八）を参照した。なお、『韋応物集校注』は題・詩中の「遊」を「游」に作るが、読み・意味に違いは無い。
- (6) 作年代・作地は『韋応物集校注』による。
- (7) 『韋応物集校注』によれば、「適越意」は才能を抱きながら不遇である、という意であるという。また崔翰が初めて官職に就いたのは、貞元八（七九二）年である。したがって、彼は越に赴いたというわけではなく、失意のうちに旅に出た、ということの

ようである。

(8) 『韋応物集校注』にあるように、この事件は李肇『国史補』(巻中)に見える。「杜太保(佑)在淮南進崔叔清詩百篇、徳宗謂使者曰：『此惡詩、焉用進?』時呼為『準救惡詩』。」

(9) 『韋応物集校注』にあるように、崔翰の人となりは韓愈「崔評事墓誌銘」(『全唐文』巻五百六十六所収)から窺える。「談諧縱譁、卓詭不羈、又善飲酒。」

「魯山山行」の第二聯と第三聯のつながり

——「随処改」「迷」の表現をめぐって——

一、問題

宋の方面が『瀛奎律髓』で「熊鹿一聯人皆称其工(熊と鹿の一聯、人は皆その巧みさを讃える)」と述べるように、「魯山山行」は第三聯「霜落熊昇樹 林空鹿飲溪」に特徴がある。詩の構造上でも詩人が一番力を入れる部分は起承転結の転にあたる。しかし、方回は続けて「然前聯尤幽而有味(だが、前聯がとりわけ奥深く味があるのだ)」とも述べるように、第二聯「好峰随処改 独径幽行迷」にも「魯山山行」の「特異さ」がある。しかしそれがなぜ「特異」であると感じるのか。私は、第二聯を中心に分析することにより「魯山山行」の特徴を明らかにしたい。その際、分析の対象を「随処改」と「迷」に置いた。「随処改」は「好き峯は処に随いて改まる」というように「変化する景色」である。これに対して「非・変化する景色」(≡静止する景色)が存在し、それらの詩をいささかなりとも読み慣れているから「随処改」の表現を特異だと感じるのではないかという仮説を立てた。そこで、「魯山山行」に至るまでの詩においてどのような景色が詠まれているか、特に「随処」がどのように使われているかを数詩の例と比較し検討したい。